

タイトル:2022年度 教育セミナー (第18回)

日時:2022年9月15日(木)~18日(日)

ハイブリッド開催

「越境のすすめ:ロシアのムスリム地域からの提案」

長縄 宣博(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター/AA研)

ヴォルガ川流域、ウラル山脈、西シベリアに広がる小さなムスリム社会(タタール人やバシキール人)の歴史研究は、日本ではマイナーな分野ではあるが、ソ連解体後30年でロシアをはじめ国際的には、質量ともに著しく成長してきた。その史学史を振り返ると、このイスラーム世界北辺のムスリム・マイノリティが、歴史学上の様々なテーマと接合してきたことが看取できる。換言すれば、地域を越える問題設定こそが、研究を牽引してきたとさえ言える。本講義では、ヴォルガ・ウラル地域に関する史学史の軌跡を史料と共に振り返ることで、修士課程の学生が各自のテーマで既存の分析枠組みを超えるためのヒントを得られるように努めた。

ヴォルガ・ウラル地域のイスラーム研究では、主に二つの牽引力が働いてきた。一つは歴史学における帝国研究の隆盛である。ロシア帝国/ソ連研究の刷新で重要だったのは、民族が近代に想像/創造されたものであるという見方の普及に加え、ソ連解体前後から図書館が外国人にも自由に利用できるようになったことである。この理論上の転回と史料の増大は相乗効果を生み、「ロシア帝国論」とまとめられる成果が爆発的に生み出された。もうひとつの牽引力は、中東や植民地帝国下のムスリム社会に関する研究との対話である。ロシア帝国論の最大の成果の一つは、ロシア帝国が身分と宗教に基づいて多種多様な人間集団に権利と義務を配分し、それをある種の契約関係とみなす臣民が権力と巧みな交渉を繰り返して、各共同体内部の紛争を個別主義的な帝国の法に基づいて調停していたという統治と社会の相互関係の実態を解明した点にある。こうして、帝政ロシアでシャリーア法廷がどのように機能していたのか、という研究も積み重ねられるようになった。

これらを踏まえて本講義では、ヴォルガ・ウラル地域の研究がロシアと中東との関係史にどのように貢献してきたのかを振り返り、講師自身の現在の研究課題を紹介した。柱とした論点は次のとおり。ロシア帝国の中の「ミット制」(オスマン帝国の非ムスリム行政との比較)。知識人のネットワーク。巡礼。軍事作戦に伴う大規模な移住。第一次世界大戦。20世紀史の「アナーキスト的転回」、すなわち、帝国統治に抵抗する主体とその反帝国主義の思想と行動を水平方向のネットワークの形成という観点から分析する世界史の研究潮流。そして、方法としての個人の伝記が、領域や集団を分析単位として特権化する従来の枠組みから抜け落ちる人間や地域の意外な結びつきを解明する上で極めて有効であることを説明した。これらの事例を通じて本講義は、各自が前提とする「先行研究」の幅を意識的に拡大してみることを提案した。もっとも、各自が専門とする地域を十分理解しないうちに横断したり越境したりするのは危険であり、越境先の地域についても言語を習得し、一次史料を読み解くのが理想である。とはいえ、専門地域の外側に目を向け、その外との関係性が自分の地域にどのような意味があるのかを再帰的に考察することで、各自の眼前にある史料の読み方が変わり、各自の専門の地平も広がっていくのである。